

アクティブシニアのボランティア活動参加と構造的
制約条件：
福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から6

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-09-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚本, 利幸, 舟木, 紳介, 橋本, 直子, 永井, 裕子 メールアドレス: 所属:
URL	https://fpu.repo.nii.ac.jp/records/41

[研究論文]

アクティブシニアのボランティア活動参加と構造的制約条件

— 福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から 6 —

塚本 利幸・舟木 紳介・橋本 直子・永井 裕子

1. はじめに

少子高齢社会の本格化にともない、地域・社会を誰にとっても暮らしやすいものにしていくための方途の1つとして、ボランティア・市民活動（NPOなど）の取り組みを充実させることが注目されている。人口に占める高齢者の割合が増加する中、元気で活発な高齢者（アクティブシニア）の社会活動参加に、1）地域や社会全体の活力向上への貢献と、2）介護予防の効果、への期待が寄せられている。

アクティブシニアという用語は団塊の世代が定年退職を迎え始めた2007頃から使われだされたもので、自分なりの価値観をもった元気な高齢世代であり、年齢に関係なく仕事や趣味に意欲的で、社会に対してもアクティブに行動するシニアのことを指す。総務省の『平成22年度情報通信白書』（2010）や『ICT超高齢社会構想会議報告書』（2013）では、ICT（情報通信技術）の積極的な利用によって、アクティブシニアが蓄積した知識・経験を生かして、地域づくりなどの社会活動やボランティア活動の担い手として活躍することの重要性が指摘されている。本稿では60歳以上のシニア層のうち市民活動やボランティア活動に関心を持ち、参加の意向を有しているものや、実際にそうした活動の担い手として活躍しているものをアクティブシニアと定義する。

福井県立大学ボランティア研究会の調査・研究プロジェクトでは、シニア層のボランティア活動参加の規程要因に関して、これまであまり注目されてこなかった個人ベースでの社会関係資本¹⁾（社会的なネットワークへの包摂の程度、互酬的な関係性、他者への信頼）や社会的な関心のあり方、などを中心とした分析枠組みを設定し、調査票の設計を行い、アンケート調査を実施した²⁾。研究のアウトプットに関しては、2016年から順次、性別や年齢などの基本属性、社会関係資本、社会的な関心のあり方といった要因とボランティア活動参加の関係についての分析結果を公表してきた（塚本・舟木・橋本・永井2016a、2017、2018）。

本稿では、時間的ゆとり、経済的ゆとり、健康状態などとシニア層のボランティア活動への

受付日 2019.5.7

受理日 2019.7.2

所属 看護福祉学部

参加経験や今後の参加の意向との関係について分析をおこなう³⁾。時間的ゆとりや経済的ゆとりに恵まれず、健康面で問題を抱えていると、ボランティア活動への参加意欲を持つことが困難であったり、意欲があったとしても、それらの要因によって参加が制約を受けたりすることが予想される。そうした意味で、以下ではこれらの要因を、構造的制約条件と呼ぶことにしたい。

2. アンケート調査の概要と研究方法

福井県はボランティア活動が盛んで、「平成28年社会生活基本調査」によれば、福井県の行動者率（過去1年間に何らかの「ボランティア活動」を行ったものが10歳以上人口に占める割合）は32.2%で、全国平均の26.0%を大幅に上回り、全国第9位となっている。

福井県立大学ボランティア研究会では、高齢者のボランティア活動参加の実態を明らかにする目的で、60歳から80歳までの福井県在住の一般住民から無作為抽出⁴⁾した2000人を対象に「ボランティア・市民活動（NPOなど）に関するアンケート」を郵送法で、2013年6月に実施した⁵⁾。

有効回収数は949件（回収率47.5%）であった。回答者の基本属性（性別と年代）は表1の通りである。

この調査データを、統計的な手法（クロス集計とカイ2乗検定、順位相関係数、因子分析、クラスター分析など）を用いて、分析する。

表1 回答者の基本属性

項目	カテゴリ	%
性別 (n=936)	男性	49.9
	女性	50.1
年齢 (n=937)	60～64歳	30.2
	65～69歳	25.3
	70～74歳	20.7
	75～80歳	23.8

3. 倫理的配慮

アンケート調査の実施にあたっては、インフォームド・コンセントに留意するとともに、無記名式でおこなった。分析および分析結果の公表に際しては、全体として集計し、統計的な手法を用いた処理をおこない、個人の回答内容が特定されることのない形式を採用する。

4. 分析結果

(1) 今後、ボランティア活動に参加したくない理由

調査では、今後のボランティア活動への参加の意向を尋ね、「参加したくない」と回答したものに、その理由を尋ねている。「その他」を含む14の選択肢から、あてはまるものすべてを選んでもらった結果が図1である。「健康に自信がないから」が65.3%と突出して多く、回答者の半数以上がこの選択肢を選んでいる。次いで、「時間的に余裕がないから」の35.2%が続き、回答者の3分の1以上がこの選択肢を選んでいる。3番目に多いのが「経済的に余裕がないから」

の18.9%で、本稿で構造的制約条件として分析の組上に載せる3つの要因がトップ3を占める結果となっている。

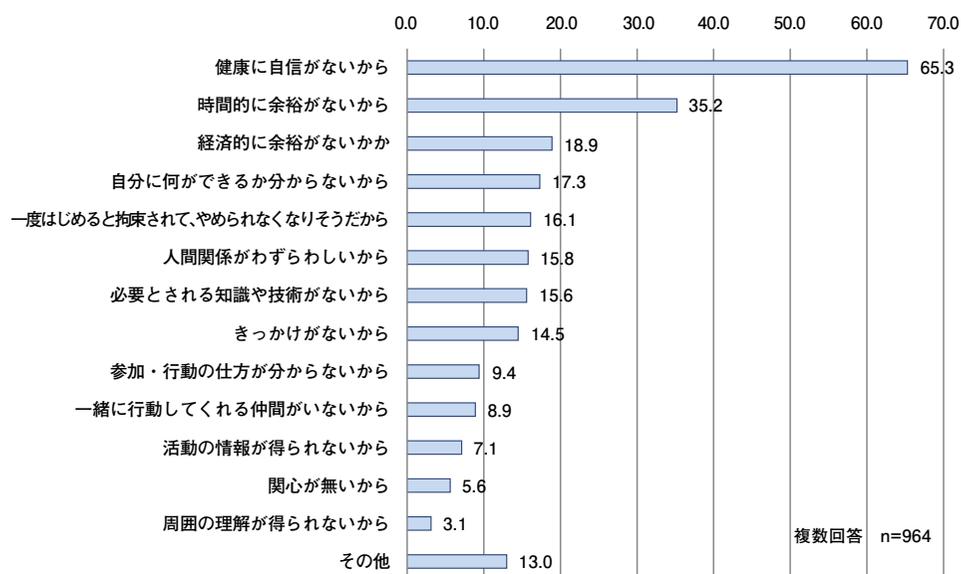


図1 ボランティア活動への参加を希望しない理由

(2) ボランティア活動への参加経験と構造的制約条件の関係

1) 健康状態との関係

調査では、現在の健康状態について、「非常に健康」から「まったく健康でない」までの4段階で尋ねている（以下では「健康状態」と表記）。ボランティア活動への参加経験との関係を分析したものが図2である⁶⁾。

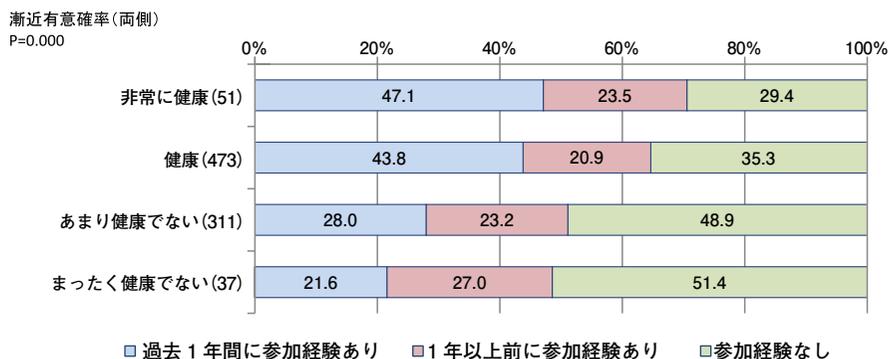


図2 健康状態 × ボランティア活動の参加経験

過去1年間のボランティア活動の参加率についてみると、「非常に健康」、「健康」と回答したもので40%を超えるのに対して、「あまり健康でない」、「まったく健康でない」では30%を下回る。逆に、参加経験のないものの割合は、前者のグループが30%前後なのに対して、後者のグループは50%前後に達する。1%水準で有意な結びつきが確認され、健康状態が良好でないと、ボランティア活動への参加が困難になることがうかがえる。

2) 時間的なゆとりとの関係

調査では、時間的な要因に関して、①主観的なゆとりの程度について、「かなりある」から「まったくない」の5段階で、②平日に自由に使える時間の1日あたりの平均について、③平日に家事、育児、介護に要する時間の1日あたりの平均について、それぞれ尋ねている。ボランティア活動への参加経験との関係を分析したものが図3～5である^{7) 8) 9)}。

すべての分析で有意な相関はみられない。

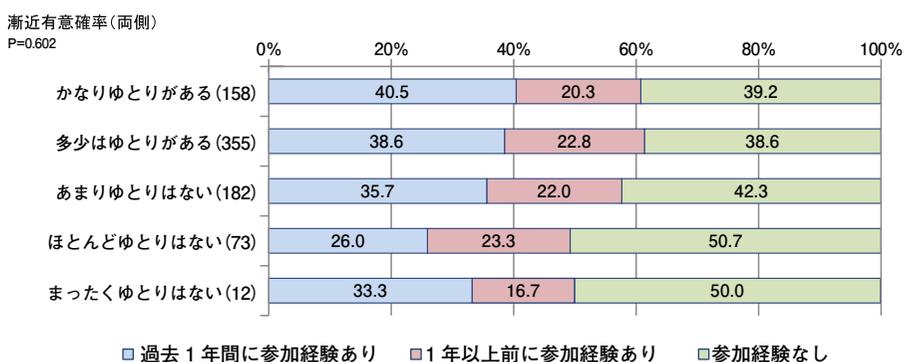


図3 時間的なゆとり × ボランティア活動の参加経験

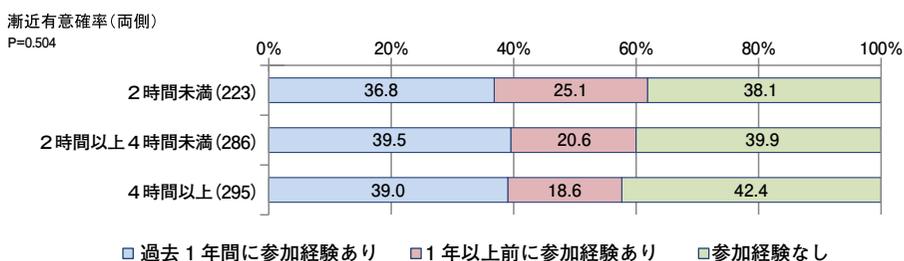


図4 平日の自由時間 × ボランティア活動の参加経験

アクティブシニアのボランティア活動参加と構造的制約条件

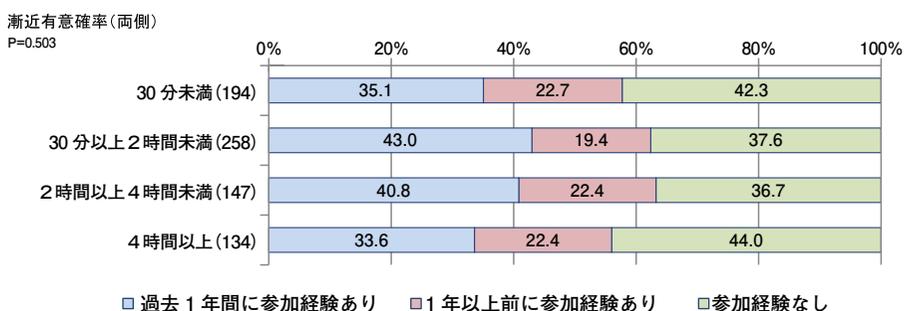


図5 平日の家事・育児・介護時間 × ボランティア活動の参加経験

3) 経済的なゆとりとの関係

調査では、経済的な要因に関して、①主観的なゆとりの程度について、「かなりある」から「まったくない」の5段階で、②世間一般と比較した生活の程度について、「上」、「中の上」、「中の中」、「中の下」、「下の上」、「下の中」、「下の下」の7段階で尋ねている。②に関しては、「上」、「下の下」といった回答がほとんどみられなかったため、以下の分析では5段階にまとめ直したものをを用いる。ボランティア活動への参加経験との関係を分析したものが図6、7である^{10) 11)}。

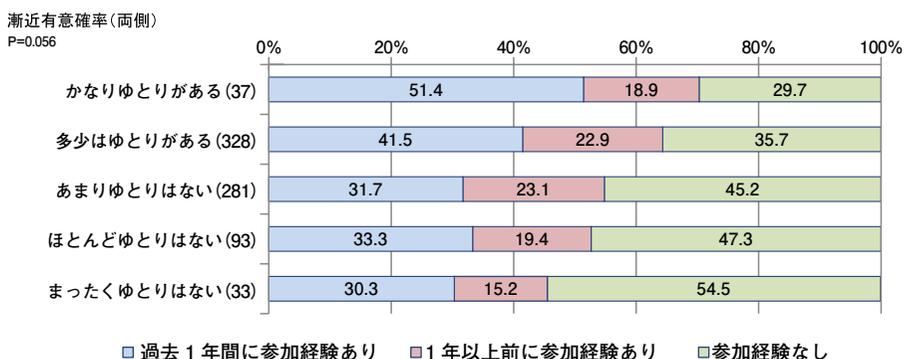


図6 経済的なゆとり × ボランティア活動の参加経験

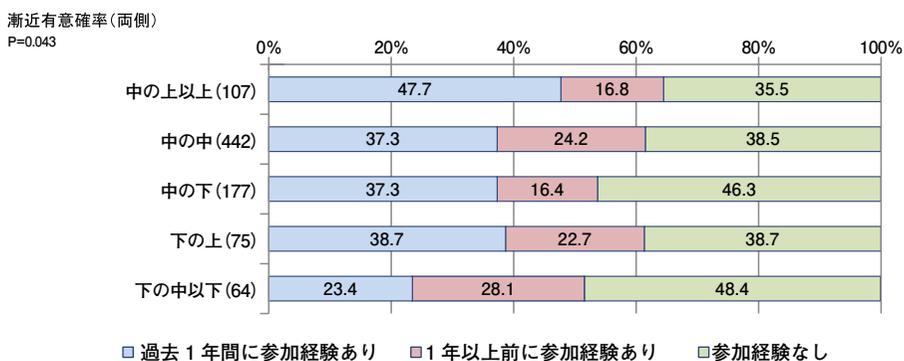


図7 生活の程度 × ボランティア活動の参加経験

主観的なゆとりの程度とは有意な結びつきがみられないが、生活の程度の比較とは5%水準で有意な結びつきが確認される。過去1年間の参加経験に関して、「中の上以上」と回答したもので豊富、「下の中以下」と回答したもので乏しいという傾向がみられ、世間一般との比較において生活水準に極端な差が意識されるような場合には、ボランティア活動参加に影響を及ぼすことが推測される。

4) 精神的なゆとりとの関係

調査では、精神的なゆとりの程度について、「かなりある」から「まったくない」の5段階で尋ねている。健康状態が思わしくなかったり、時間的、経済的にゆとりがなかったりすると、精神的にもゆとりがなくなることが予想される。ボランティア活動への参加経験との関係を分析したものが図8である¹²⁾。

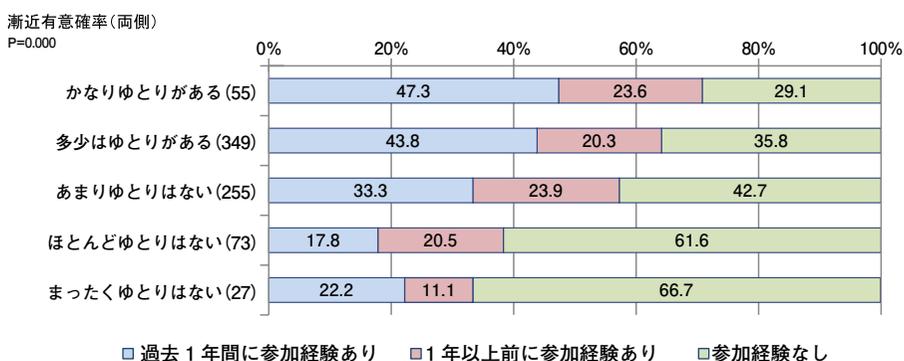


図8 精神的なゆとり × ボランティア活動の参加経験

ゆとりがある層で、過去1年間に参加経験のあるものが40%を超えるのに対して、「ほとんどゆとりがない」、「まったくゆとりがない」と回答したものでは、参加経験なしが60%を超える。1%水準で有意な結びつきが確認され、精神的にゆとりがないと、ボランティア活動への参加が困難になることがうかがえる。

過去1年間の参加経験に関して、「健康状態」との間に1%水準で有意な結びつきが確認されたのに対して、時間的な要因との間には結びつきが確認されなかった。経済的な要因との間には、2項目のうち1項目で5%水準の結びつきがみられた。ゆとりの程度に関する総合的な指標になっていると考えられる「精神的なゆとり」との間には1%水準で有意な結びつきがみられた。

(3) 今後のボランティア活動への参加の意向と構造的制約条件の関係

1) 健康状態との関係

健康状態と今後のボランティア活動への参加の意向との関係を分析したものが図9である¹³⁾。

「非常に健康」、「健康」と回答したもので、「参加したい」が70%前後に達するのに対して、「あまり健康でない」、「まったく健康でない」では「参加したくない」が70%前後に達する。1%水準で有意な結びつきが確認され、健康状態が良好でないと、ボランティア活動への参加意欲を持つことが困難であることがうかがえる。

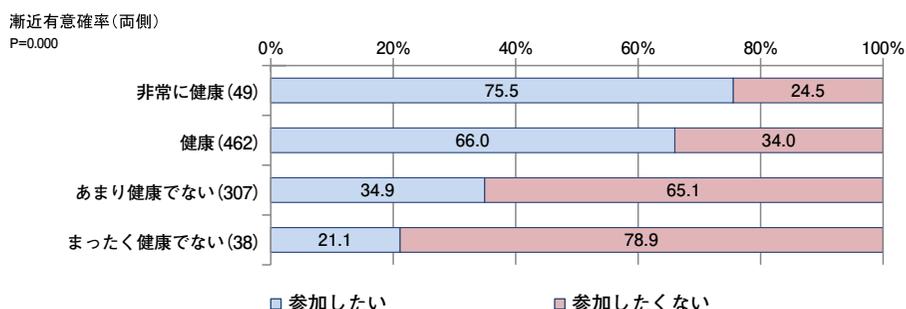


図9 健康状態 × ボランティア活動への参加の意向

2) 時間的なゆとりとの関係

①主観的なゆとりの程度、②平日に自由に使える時間の1日あたりの平均、③平日の家事、育児、介護に要する時間の1日あたりの平均と、今後のボランティア活動への参加の意向との関係を分析したものが図10～12である^{14) 15) 16)}。

すべての分析で有意な相関はみられない。

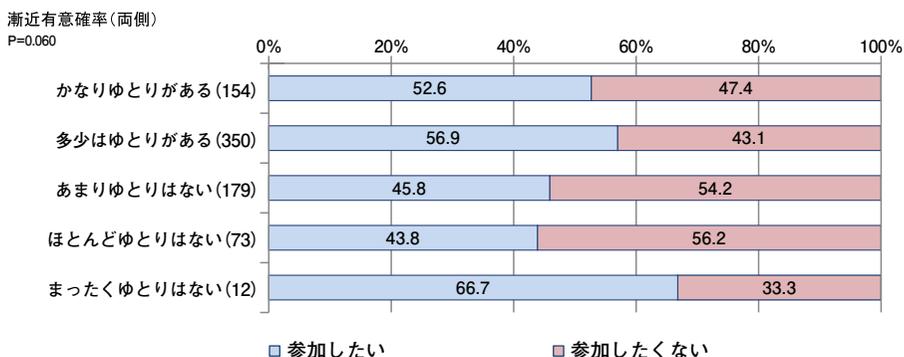


図 10 時間的なゆとり × ボランティア活動への参加の意向

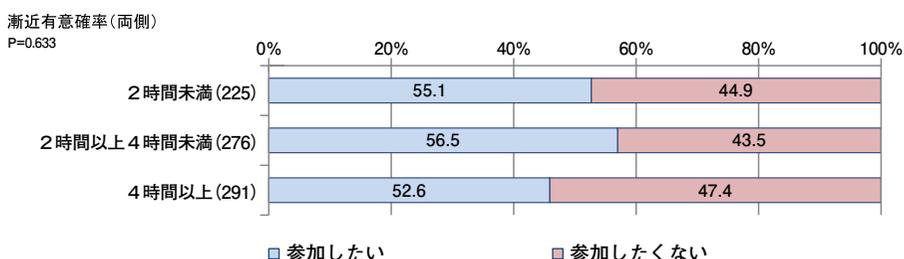


図 11 平日の自由時間 × ボランティア活動への参加の意向

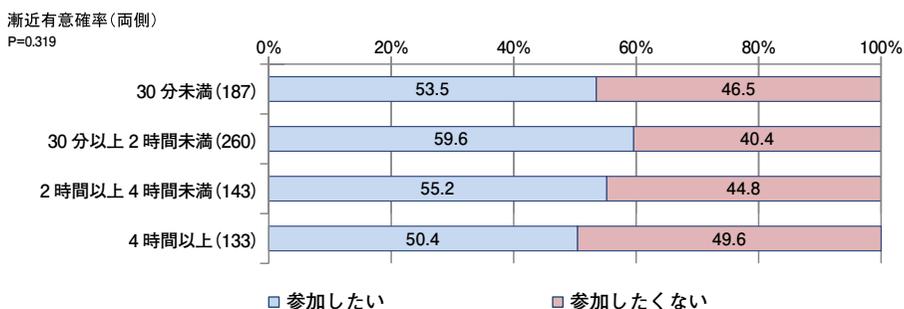


図 12 平日の家事・育児・介護時間 × ボランティア活動への参加の意向

今後、ボランティア活動に「参加したくない」と答えたものに、その理由を尋ねると、3分の1以上のものが「時間的に余裕がないから」を選択していた。一方、上記の分析からは、時間的な要因とボランティア活動への参加の意向との間に有意な結びつきは確認されなかった。これは、参加の意向を有するものにも時間的な余裕が乏しいものが少なくなく、彼らは「時間的に余裕がないのだけれど」、それでも参加したいと考えているからであると解釈できる。

3) 経済的なゆとりとの関係

経済的な要因に関して、①主観的なゆとりの程度、②世間一般の人と比較した生活の程度とボランティア活動への参加の意向との関係を分析したものが図13、14である^{17) 18)}。

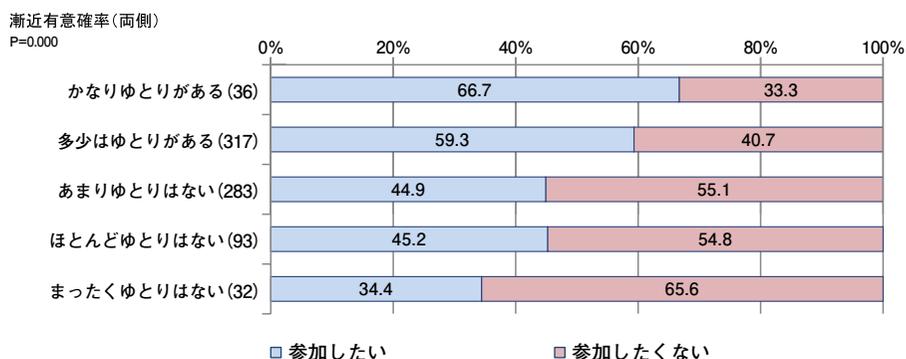


図 13 経済的なゆとり × ボランティア活動への参加の意向

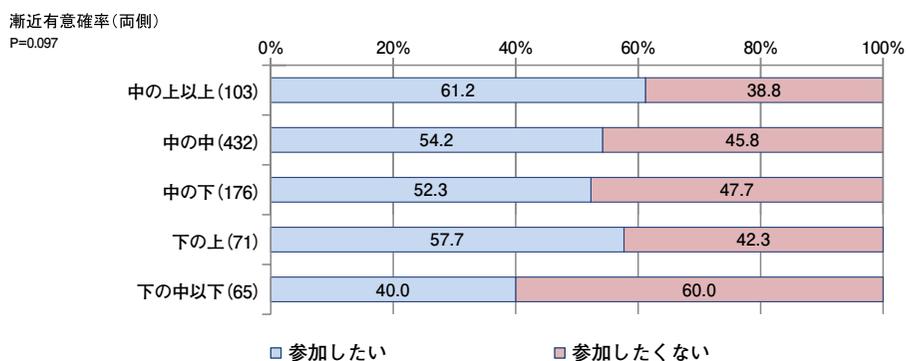


図 14 生活の程度 × ボランティア活動への参加の意向

①主観的なゆとりの程度との関係では、「多少はゆとりがある」と回答したもので、「参加したい」が59.3%と過半数に達するのに対して、「あまりゆとりはない」と答えたものでは、逆に、「参加したくない」が55.1%で過半数を占める。1%水準で有意差があり、経済的なゆとりがないと、ボランティア活動への参加意欲を持つことが困難になることが推測される。一方、②世間一般と比較した生活の程度との間には、有意な結びつきが確認されなかった。

4) 精神的なゆとりとの関係

精神的なゆとりとボランティア活動への参加の意向との関係を分析したものが図15である¹⁹⁾。1%水準で有意な結びつきがあり、精神的なゆとりが乏しくなるとボランティア活動への参加意欲を持つことが難しくなるという傾向が確認される。

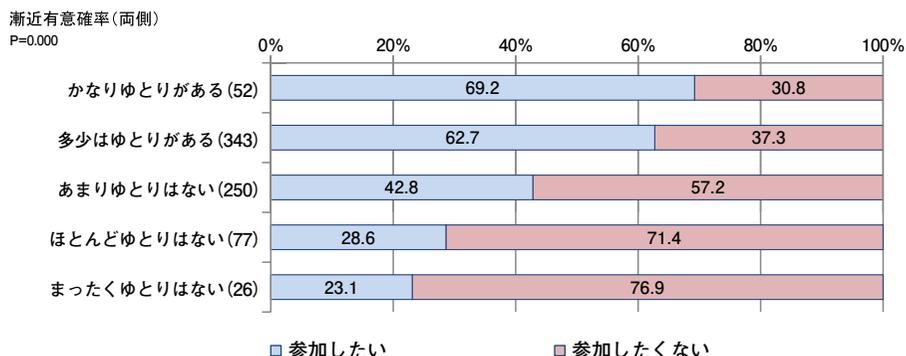


図15 精神的なゆとり × ボランティア活動への参加の意向

今後のボランティア活動への参加の意向に関して、「健康状態」との間に1%水準で有意な結びつきが確認されたのに対して、時間的な要因との間には結びつきが確認されなかった。経済的な要因との間には、2項目のうち1項目で1%水準の結びつきがみられた。ゆとりの程度に関する総合的な指標になっていると考えられる「精神的なゆとり」との間には1%水準で有意な結びつきがみられた。

(4) ボランティア活動の実施頻度と構造的制約条件の関係

調査では、過去1年間にボランティア活動への参加経験のあるものに、その頻度を「年に1～4回」、「年に5～9回」、「月に1回程度」、「月に2～3回程度」、「週に1回程度」、「週に2～3回程度」、「週に4回以上」の7段階で尋ねている。「健康状態」、時間的な要因、経済的な要因、「精神的なゆとり」、との関係を確認するために、spearmanの順位相関係数を算出したものが表2である。

表2 活動の頻度と構造的制約条件の関係

		健康状態	時間的なゆとり	平日の自由時間	平日の家事・育児・介護時間	経済的なゆとり	生活の程度	精神的なゆとり
活動の頻度	相関係数	0.112	0.059	0.102	0.003	0.074	0.087	0.125
	有意確率(両側)	0.011	0.212	0.026	0.953	0.117	0.050	0.009
	度数	511	453	474	436	447	508	438

「精神的なゆとり」とは1%水準で、「健康状態」、「平日の自由時間」、「生活の程度」とは5%水準で、有意な結びつきがあり、それぞれ、精神的にゆとりがあるほど、健康状態が良好なほど、平日の自由時間が長いほど、世間一般との比較において生活の程度が豊かであると感じているほど、ボランティア活動の実施頻度が高いという傾向が確認できる。一方で、相関係数の大きさはいずれも0.1程度であり、構造的制約条件によって、活動の頻度が説明される程度はわずかである。

(3) 活動への継続的な参加の意向と構造的制約条件の関係

以下では、過去1年間にボランティア活動に参加した経験を有し、かつ、今後も活動に参加したいという意向を持っているものを、継続的な参加の意向ありと定義し、そうした意向と構造的制約条件との関係を分析していく。

1) 健康状態との関係

過去1年間にボランティア活動の参加経験を有するものについて、今後の活動への参加の意向と健康状態との関係を分析したものが図16である²⁰⁾。「非常に健康」、「健康」と回答したものは、今後の活動について「参加したい」の比率が90%を超えるのに対して、「あまり健康でない」、「まったく健康でない」では「参加したくない」が70%以下に止まる。1%水準で有意な結びつきが確認され、健康状態が良好でないと、継続的にボランティア活動にかかわることが困難であることがうかがえる。

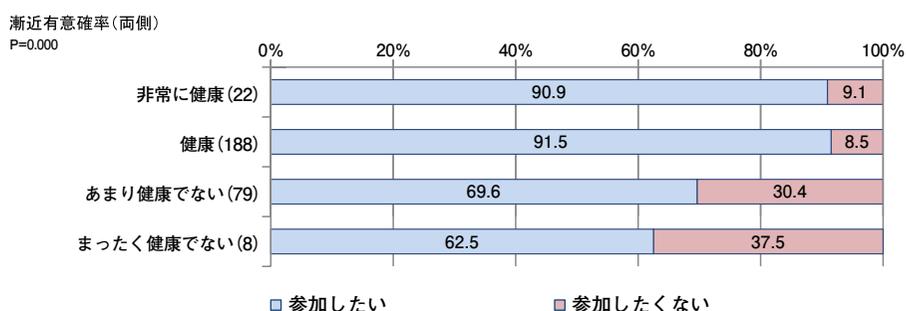


図 16 健康状態 × ボランティア活動への継続参加の意向

2) 時間的なゆとりとの関係

①主観的なゆとりの程度、②平日に自由に使える時間の1日あたりの平均、③平日の家事、育児、介護に要する時間の1日あたりの平均と、継続的なボランティア活動への参加の意向との関係を分析したものが図17～19である^{21) 22) 23)}。

すべての分析で有意な相関はみられない。

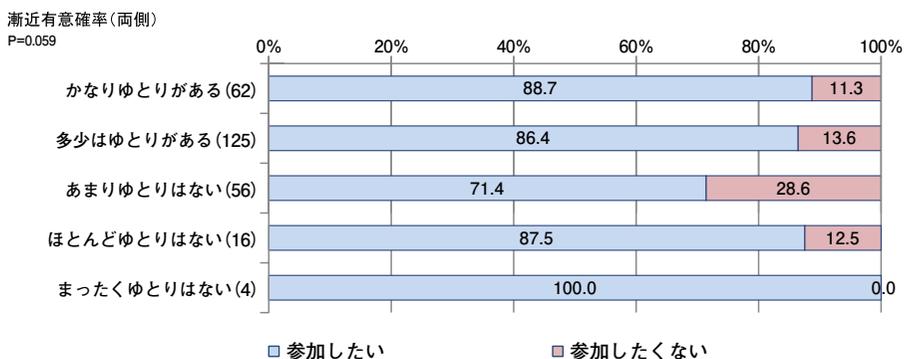


図 17 時間的なゆとり × ボランティア活動への継続参加の意向

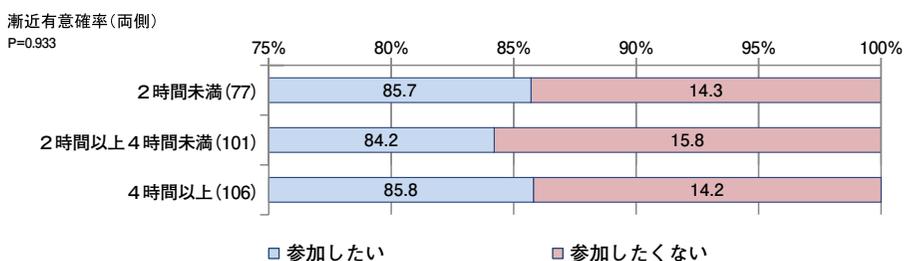


図 18 平日の自由時間 × ボランティア活動への参加の意向

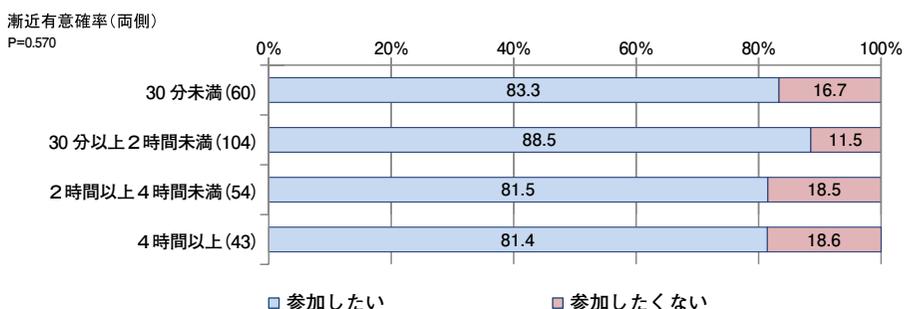


図 19 平日の家事・育児・介護時間 × ボランティア活動への継続参加の意向

3) 経済的なゆとりとの関係

経済的な要因に関して、①主観的なゆとりの程度、②世間一般との比較における生活の程度の評価と継続的なボランティア活動への参加の意向との関係を分析したものが図20、21である^{24) 25)}。

いずれの分析でも有意な相関はみられない。

アクティブシニアのボランティア活動参加と構造的制約条件

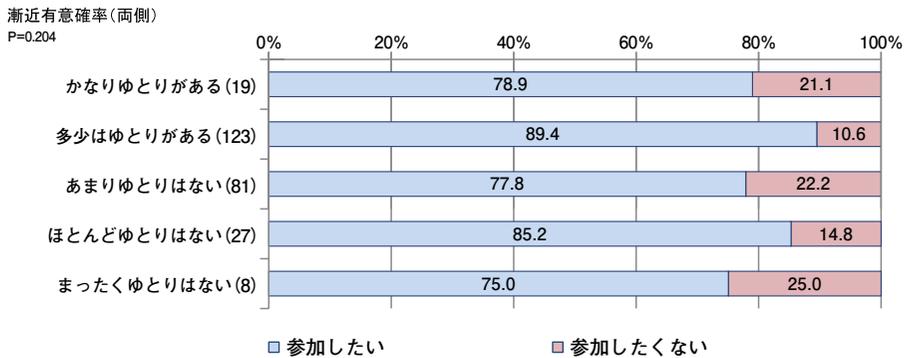


図 20 経済的なゆとり × ボランティア活動への継続参加の意向

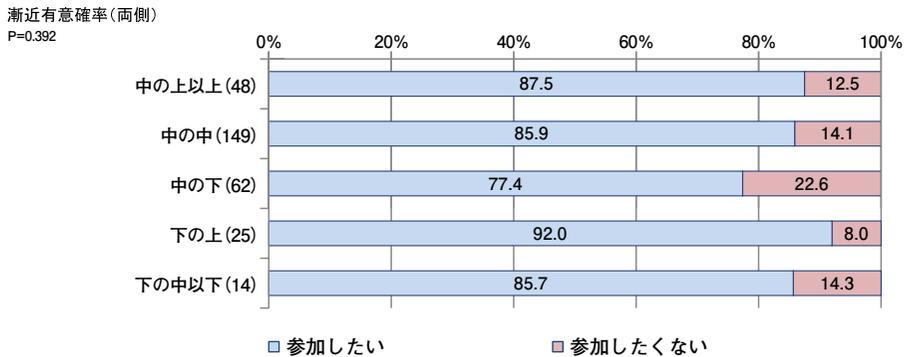


図 21 生活の程度 × ボランティア活動への継続参加の意向

4) 精神的なゆとりとの関係

精神的なゆとりと継続的なボランティア活動への参加の意向との関係を分析したものが図22である²⁶⁾。

有意な結びつきは確認されなかった。

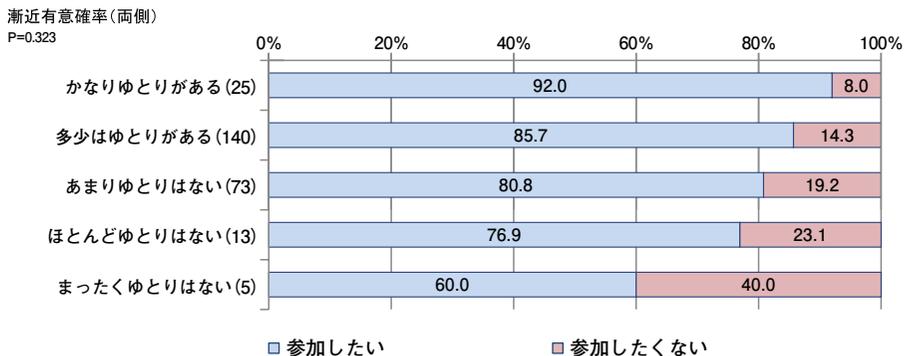


図 22 精神的なゆとり × ボランティア活動への継続参加の意向

過去1年間に参加経験を有するものに関して、継続的な参加の意図の有無との間に有意な結びつきが確認される構造的制約条件は「健康状態」だけであった。参加に向けてすでに最初の一步を踏み出しているものにとって、継続的な参加を躊躇させる要因になりうるのは、健康状態の悪化といったやりくりのしようもないほどの絶対的な条件の低下であると考えられることもできる。ボランティア活動の活性化に向けては、最初の参加をいかに引き出すかが鍵になっている可能性が高いといえよう。

(4) 構造的制約条件とボランティア参加に関する多変量分析

以下では、これまで検討してきた変数と、過去1年間のボランティア活動への参加経験、今後の参加の意向の関係について、多変量分析の手法を使って検証していきたい。

1) 変数間の相関関係

多変量分析に先立って、これまで検討してきた変数間の結びつきについて確認しておきたい。表3は、変数間の相関関係をまとめたものである²⁷⁾。

表3 変数間の相関関係

		時間的なゆとり	平日の自由時間	平日の家事・育児・介護の時間	経済的なゆとり	生活の程度	精神的なゆとり
健康状態	相関係数	0.010	0.053	0.010	0.237	0.177	0.385
	有意確率(両側)	0.771	0.130	0.793	0.000	0.000	0.000
	度数	803	824	753	794	887	781
時間的なゆとり	相関係数		-0.471	0.105	0.313	0.116	0.424
	有意確率(両側)		0.000	0.006	0.000	0.001	0.000
	度数		756	688	782	798	777
平日の自由時間	相関係数			-0.012	-0.131	-0.064	-0.163
	有意確率(両側)			0.739	0.000	0.066	0.000
	度数			723	743	822	733
平日の家事・育児・介護の時間	相関係数				-0.045	-0.034	0.046
	有意確率(両側)				0.243	0.350	0.238
	度数				676	752	670
経済的なゆとり	相関係数					0.568	0.503
	有意確率(両側)					0.000	0.000
	度数					789	778
生活の程度	相関係数						0.269
	有意確率(両側)						0.000
	度数						775

1%水準で有意な結びつきの確認されたセルに網掛けがしてあり、相関係数が0.3未満のセルは青色、0.3以上のセルは緑色になっている。0.3以上の結びつきについて確認しておくと、①健康状態が悪化すると精神的なゆとりも乏しくなること、②平日に自由に使える時間が少ないほど、時間的なゆとりが感じられないこと、③世間一般との比較において自分の生活の程度を低いと評価しているものは、経済的にゆとりがないと感じていること、④時間的なゆとり、経

経済的なゆとり、精神的なゆとりの間には、いずれかが乏しいと残りの2つも乏しい傾向があること、⑤そのうち、経済的なゆとりと精神的なゆとりの結びつきが相対的に強いこと、が示されている。

2) 構造的制約条件に関する質問項目の因子分析

これまで検討してきた要素をより少数の因子に縮約するために因子分析をおこない、その結果をまとめたものが表4である。なお、健康状態に関する質問項目は1つであったため分析からは除外してある。

因子1は「経済的なゆとり」、「生活の程度」、「精神的なゆとり」の3項目と正の大きな相関を示したため「経済的・精神的ゆとり因子」と名付けた。因子2は「時間的なゆとり」、「平日の自由時間」と正の大きな相関を示し、「平日の家事・育児・介護の時間」とは負の相関を示したため「時間的ゆとり因子」と名付けた。

表4 構造的制約条件に関する質問項目の因子分析結果

項 目	因子負荷量	
	因子1 精神的・経済的ゆとり因子	因子2 時間的ゆとり因子
経済的なゆとり	0.979	-0.074
生活の程度	0.680	-0.156
精神的なゆとり	0.452	0.282
時間的なゆとり	0.023	0.982
平日の自由時間	-0.044	0.421
平日の家事・育児・介護の時間	0.095	-0.166
累積寄与率(%)	26.713	47.738

注1) 因子抽出法: 最尤法

注2) 回転法: プロマックス法

「健康状態」と上記の2因子の相関を確認したものが表5である。1%水準で有意な結びつきの確認されたセルには網掛けがしてある。「健康状態」と「経済的・精神的ゆとり因子」の間、および、「経済的・精神的ゆとり因子」と「時間的ゆとり因子」の間には1%水準の結びつきが確認できるが、「健康状態」と「時間的ゆとり因子」の間には有意な結びつきはみられない。

表5 「健康状態」および因子間の相関関係

		経済的・精神的 ゆとり因子	時間的ゆとり因子
健康状態	相関係数	0.273	0.003
	有意確率(両側)	0.000	0.948
	度数	629	629
経済的・精神的 ゆとり因子	相関係数		0.302
	有意確率(両側)		0.000
	度数		633

3) ロジスティック回帰分析

1) 過去1年間の参加経験の有無を従属変数とした分析

ボランティア活動への過去1年間の参加経験の有無を従属変数として、健康状態、「経済的・精神的ゆとり因子」、「時間的ゆとり因子」を独立変数としたロジスティック回帰分析を行なう(モデル1)。健康状態に関しては、「非常に健康」、「健康」と回答したものを健康状態の良好なグループ、「あまり健康でない」、「まったく健康でない」と回答したものを健康状態の不良なグループとして2分割し、「経済的・精神的ゆとり因子」ならびに「時間的ゆとり因子」に関しては因子得点の中央値を基準に2分割する。分析の結果をまとめたものが、表6である。

表6 ロジスティック回帰分析の結果(モデル1)

	オッズ比	95%信頼区間	有意確率
健康状態(2分割)	1.797	1.258-2.567	P<0.001
経済的・精神的ゆとり因子(2分割)	1.115	0.797-1.561	NS
時間的ゆとり因子(2分割)	1.032	0.742-1.435	NS

NS: 有意差なし(以下同様)

モデル係数のオムニバス検定の結果、「予測に役立たない」という仮説は1%水準で棄却され、HosmerとLemeshowの検定の結果、「モデルは適合している」という仮説は支持された。一方で、NagelkerkeのR2乗の値は0.027に止まり、モデルのあてはまりの程度は高いとはいえない。

モデル1の分析に投入した3つの独立変数の内、予測に役立っているのは「健康状態」だけ(0.1%水準で有意)であり、オッズ比から分かる通り、健康状態の良好なグループは不良なグループに対して、参加経験を有するものの割合が2倍近くに達することが分かる。

ボランティア活動の参加経験には性別や年齢も影響していることが予想されるため、上記の分析に、独立変数として「性別」と「年齢」を加えたものがモデル2である。「性別」に関しては、

女性を0、男性を1に、「年齢」に関しては60歳代を0、70歳以上を1に、それぞれ設定した。分析の結果をまとめたものが、表7である。

表7 ロジスティック回帰分析の結果(モデル2)

	オッズ比	95%信頼区間	有意確率
健康状態(2分割)	1.818	1.270-2.603	P<0.001
経済的・精神的ゆとり因子(2分割)	1.095	0.780-1.537	NS
時間的ゆとり因子(2分割)	1.022	0.730-1.432	NS
性別(男性)	1.035	0.739-1.449	NS
年齢(70歳以上)	1.031	0.733-1.451	NS

モデル係数のオムニバス検定の結果、「予測に役立たない」という仮説は5%水準で棄却され、HosmerとLemeshowの検定の結果、「モデルは適合している」という仮説は支持された。「性別」と「年齢」を独立変数に加えても、NagelkerkeのR2乗の値はほとんど増加せず0.028に止まり、モデルのあてはまりの程度は高いとはいえない。

モデル2の分析に投入した5つの独立変数の内、予測に役立っているのは「健康状態」だけ(0.1%水準で有意)であり、「性別」と「年齢」を独立変数に加えても、分析結果にほとんど変化はみられなかった。

2) 今後の活動への参加の意向の有無を従属変数とした分析

今後のボランティア活動への参加の意向の有無を従属変数とし、健康状態、「経済的・精神的ゆとり因子」、「時間的ゆとり因子」を独立変数として投入したロジスティック回帰分析(モデル1)の結果をまとめたものが表8である。

表8 ロジスティック回帰分析の結果(モデル1)

	オッズ比	95%信頼区間	有意確率
健康状態(2分割)	3.140	2.208-4.466	P<0.001
経済的・精神的ゆとり因子(2分割)	1.446	1.030-2.030	P<0.05
時間的ゆとり因子(2分割)	1.191	0.851-1.667	NS

モデル係数のオムニバス検定の結果、「予測に役立たない」という仮説は1%水準で棄却され、HosmerとLemeshowの検定の結果、「モデルは適合している」という仮説は支持された。一方で、NagelkerkeのR2乗の値は、ボランティア活動への過去1年間の参加経験の有無を従属変数にし

た場合よりも高くはなるが、0.115に止まり、モデルのあてはまりの程度は高いとはいえない。

モデル1で分析に投入した3つの独立変数の内、予測に役立っているのは「健康状態」と「経済的・精神的ゆとり因子」であり、それぞれ1%水準、5%水準で有意となっている。オッズ比からは、参加の意向を有するものの割合が、健康状態の良好なグループでは不良なグループに比べて3倍ほど高く、経済的・精神的にゆとりのあるグループではゆとりのないグループに比べて1.5倍程度高いことが分かる。

上記の分析に、独立変数として「性別」と「年齢」を加えたものがモデル2である。分析の結果をまとめたものが、表9である。

表9 ロジスティック回帰分析の結果(モデル2)

	オッズ比	95%信頼区間	有意確率
健康状態(2分割)	3.188	2.228-4.560	P<0.001
経済的・精神的ゆとり因子(2分割)	1.541	1.089-2.181	P<0.05
時間的ゆとり因子(2分割)	1.213	0.856-1.719	NS
性別(男性)	1.252	0.886-1.773	NS
年齢(70歳以上)	0.553	0.389-0.787	P<0.001

モデル係数のオムニバス検定の結果、「予測に役立たない」という仮説は1%水準で棄却され、HosmerとLemeshowの検定の結果、「モデルは適合している」という仮説は支持された。「性別」と「年齢」を独立変数に加えると、NagelkerkeのR2乗の値は0.144まで増加するが、モデルとしてのあてはまりは依然として高いとはいえない。

5つの独立変数を投入したモデル2では、「健康状態」と「経済的・精神的ゆとり因子」に加え「年齢」も予測に役立つという結果となった。それぞれ0.1%水準、5%水準、0.1%水準で有意となっている。オッズ比からは、参加の意向を有するものの割合が、健康状態の良好なグループでは不良なグループに比べて3倍ほど高く、経済的・精神的にゆとりのあるグループではゆとりのないグループに比べて1.5倍程度高いこと、70歳以上の年齢層では60歳代の年齢層に比べて半分程度に低下することが分かる。

モデル2で投入した「年齢」に関して、過去1年間の参加経験の有無を従属変数にした分析では有意にならなかったのに、今後の活動への参加の意向の有無を従属変数にした分析では0.1%水準で有意になるというコントラストがみられた。現時点で、ボランティア活動に参加が可能なのか不可能なのかに関しては、1) 身体的なコンディションが重要な制約要因として働くこと、2) 健康状態に問題がなければ、年齢そのものは制約要因にならないこと、がうかがえる。今後の活動参加への意向に関しては、1) 現時点での健康状態が制約要因として働く

だけでなく、2) 加齢に伴い将来的に身体的なコンディションが低下するであろうという予測が、年齢の高いグループほどより強く働くため、年齢も制約条件に加わってくるのだと推察される。

4) クラスタ分析によるグループ分け

「経済的・精神的なゆとり因子」ならびに「時間的ゆとり因子」の因子得点と「健康状態」に関する4段階の得点を用いて、クラスタ分析（Ward法）をおこない、回答者を3つのクラスタに区分した。クラスタごとに3変数の平均点を算出し、偏差値についてまとめたものが図23である。

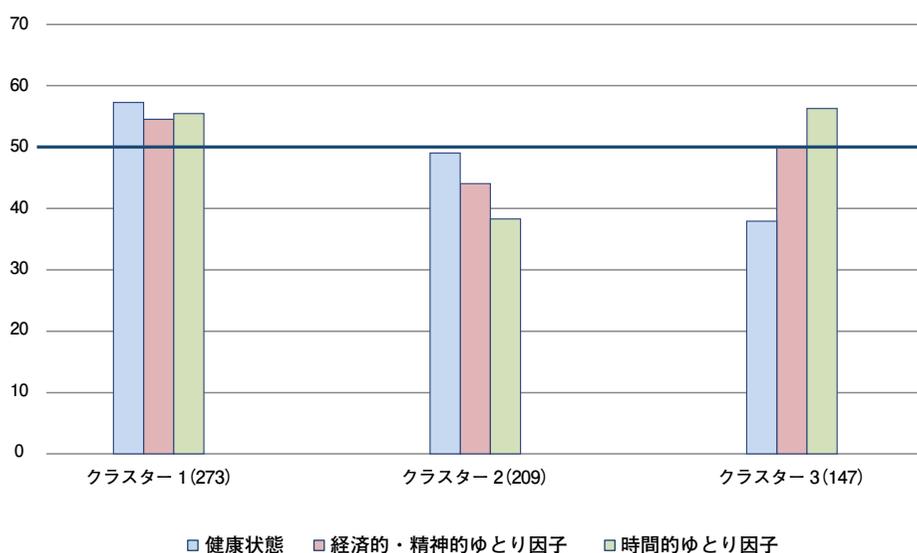


図 23 構造的制約条件によるクラスタ分け

クラスタ1は、3つの要素すべてで平均を上回り、健康状態が良好で、経済的・精神的にも時間的にもゆとりのあるグループである。クラスタ2は、健康状態こそ平均に近いが、経済的・精神的なゆとりには恵まれず、時間的ゆとりはかなり乏しいグループである。クラスタ3は、経済的・精神的なゆとりに関しては平均的で、健康状態には問題を抱えているが、時間的なゆとりは感じているグループである。健康上の理由から活動に制約がかかるがゆえに、時間に余裕が生じているのかもしれない。

性別とクラスタの関係を確認したものが図24である²⁸⁾。1%水準で有意差があり、女性に比べて男性で、クラスタ1の割合が低く、クラスタ2の割合が高くなっている。健康で各種のゆとりに恵まれたシニア層は女性の方に多く、健康状態に特に問題はないものの、経済的・精神的ゆとりや時間的ゆとりに乏しいものは男性の方に多いという結果となった²⁹⁾。

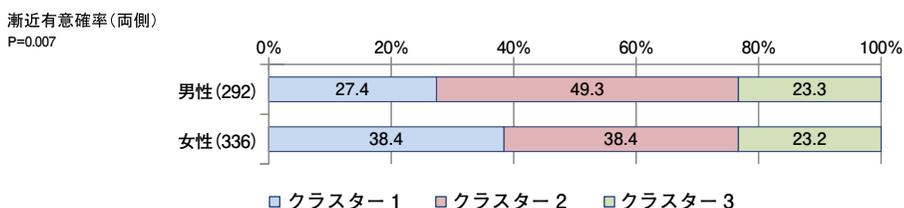


図 24 性別 × クラスター

年代とクラスターの関係を確認したものが図25である³⁰⁾。年代に関して、クラスター分布に有意差はみられなかった³¹⁾。

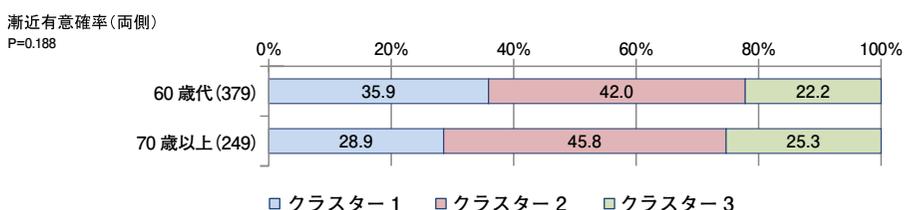


図 25 年代 × クラスター

過去1年間のボランティア活動への参加経験の有無とクラスターの関係について分析したものが図26である³²⁾。1%水準で有意差があり、クラスター1、クラスター2、クラスター3の順に参加経験を有するものが多い。クラスター分けに用いた3つの要素のうち、平均値がこの順で推移するのは「健康状態」だけであり、構造的制約条件のうち参加経験の多寡を強く規定するのがこの要因であることがうかがえる。

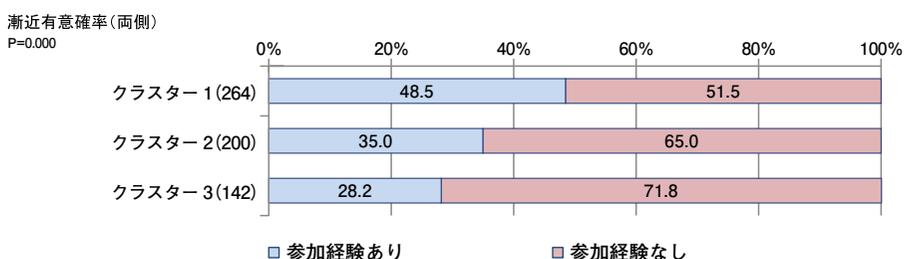


図 26 クラスター × 過去 1 年間の参加経験の有無

今後のボランティア活動への参加の意向の有無とクラスターの関係について分析したものが図27である³³⁾。1%水準で有意差があり、クラスター1、クラスター2、クラスター3の順に参加の意向を有するものが多い。クラスター分けに用いた3つの要素のうち、平均値がこの順で推移するのは「健康状態」だけであり、構造的制約条件のうち参加の意向の多寡を強く規定する

のがこの要因であることがうかがえる。

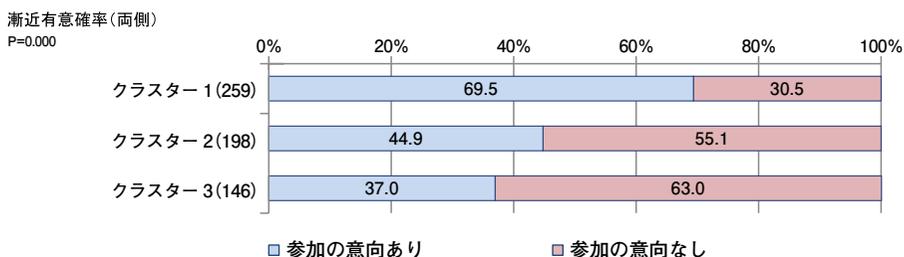


図 27 クラスター × 今後の参加の意向の有無

5. まとめ

ボランティア活動への参加経験、参加の意向の有無と構造的制約条件との関係について、いくつかの手法で分析をおこなってきた。すべての分析において一貫して有意な相関がみられたのは健康状態であり、シニア層のボランティア活動参加において、健康であることが重要な前提条件となっている可能性が示唆されている。経済的な要因との関係については、いくつかの分析において、有意な結びつきが確認されたにとどまり、健康状態に比べれば参加を規定する程度が高くないことがうかがえる。時間的な要因との関係については、ほとんどすべての分析において有意な結びつきが確認されなかった。

ボランティア活動に参加したくない理由の分析結果にも示されているように、ボランティア活動に参加しない、参加できない理由として、時間がないからというエクスキューズが採用されることはめずらしくない。時間的な要因とボランティア活動参加の間に、ほぼ一貫して有意な結びつきが確認されないという分析結果は、常識に反していると感じられるかもしれない。

本稿の執筆メンバーは、長年にわたって、様々な分野におけるボランティア活動の熱心な実践者に対して、聞き取り調査を実施してきた。そうした聞き取りにおいて、参加の動機として、時間を持て余していたから、他に時間の使い道がなかったから、といった説明を受けたという経験を持たない。

一方で、空いた時間の使い道として、ボランティア活動への参加が一般的な選択肢になっているわけではなく、他方で、ボランティア活動の参加者の多くは、時間的なやりくりをして、もしくは、やりくりをしてまで、参加のための時間を捻出しているというのが実態であろう。こうした実態に照らし合わせれば、時間的な要因とボランティア活動参加の間に結びつきがみられないのは、それほど奇異な事態ではないように思われる。

今回の調査は対象者をシニア層に絞ったものであったため、他の年代層に比べ相対的に時間的な余裕に恵まれているものが多く、加齢や疾病に伴う体力の衰えの方が、規定要因として強

く働いたという可能性も払拭できない。時間的な要因との関係については、他の世代との比較研究が課題であるといえよう。

今後のボランティア活動の活性化という文脈において、時間的なゆとりの確保がどの程度の重要性を持つかに関しては、いくつかの解釈が成り立つと思われる。

一方で、時間的なゆとりの有無が、ボランティア活動の行動者率に影響するほどには、ボランティア活動参加が時間の使い道の一般的な選択肢として、定着していないという可能性が考えられる。そうであるなら、優先的な課題は、ボランティア活動の普及に向けた啓発活動、参加体験の促進などということになるだろう。

他方で、時間的な要因とボランティア活動参加に関して、唯一、有意な結びつきが確認されたのは、平日の自由時間と活動への参加頻度であった。ボランティア活動に、機会に応じて単発的に参加するだけでなく、企画・運営の段階から関わろうとすれば、参加に要する時間的なコストは飛躍的に増大する。ボランティア活動が定着していく上で、多様な選択肢が、様々なネットワークを通して提示されることが必要だと思われる。時間的なゆとりに恵まれた層が、ある程度存在し、コアメンバーとして、ボランティア活動の企画・運営を恒常的に担える状況が実現することが、ボランティア活動の一般化に向けて整備されるべき条件の一つになっている可能性も否定できない³⁴⁾。

時間的な要因をはじめとする構造的制約条件とボランティア活動参加の関係に関しては、今後も様々な角度から継続的に調査を進めていきたい。

謝辞

本稿で報告した調査・研究プロジェクトを進めるにあたり、平成24年度から25年度にかけて福井県立大学地域貢献研究として助成を受けた。調査研究を進めていく上で、福井県総合政策部政策推進課、福井県健康福祉部長寿福祉課生きがい支援グループ、福井県健康福祉部地域福祉課地域健康福祉グループ、から適切なアドバイスをいただいた。アンケート調査の実施にあたっては、サンプリング作業に関して県内各市町村の関係部署に、回答に関して一般住民の皆様にご協力いただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

注

- 1) 社会関係資本に関する先行研究の検討と概念の整理に関しては、塚本・小林・酒井(2013)を参照。
- 2) 福井県立大学ボランティア研究会が平成25年度に実施したアンケート調査で採用した分析枠組みの詳細については、福井県立大学ボランティア研究会(2014)を参照。データの実証的な分析に基づく分析枠組みの形成過程については、塚本(2011)に記載がある。
- 3) 福井県立大学ボランティア研究会の調査・研究プロジェクトでは、これまで同一のデータセットを用いた分析に基づき、本稿のサブタイトルに示されているように6本の論文を執筆・公表してきた。今後、調査・研究プロジェクトの総括として、これまで検討してきた基本属性、社会関係資本、社会的な関心のあり方、構造的制約条件といった要因とボランティア活動参加の関係についての総合的な分析を予定している。
- 4) 住民基本台帳を抽出台帳として系統抽出法で実施した。
- 5) ボランティア活動に関する調査・研究では、ボランティア活動の定義が問題になる。今回の調査では、ボランティア活動に関して、一般的に指摘されるミニマムの構成要素としての「公共性」、「自発性」、「非営利性」を前提した定義を採用した。調査票の冒頭部分において、「「ボランティア活動」とは、自分の本来の仕事(家事や育児、介護、学業などを含む)とは別に、他人や社会のために、自分の時間や労力を、自発的に(なんらかの強制によるのではなく)、営利を目的とすることなく、提供する活動のことを指します」と定義を明示したうえで、回答を求めている。
- 6) どのセルが有意に寄与しているかの検討には残差分析が必要であるが、本稿の紀要論文という性格を考慮し、本文中にはクロス集計の結果をグラフ化したものを示す。調整後の残差に関しては、注に示す(以下同様)。

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
非常に健康	1.49	0.23*	- 1.66
健康	4.32**	- 1.02	- 3.39**
あまり健康でない	- 4.37**	0.65	3.76**
まったく健康でない	- 2.01*	0.71	1.38

* : $P < 0.05$ 、** : $P < 0.01$ (以下の表でも同様)

7)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
かなりゆとりがある	1.01	- 0.61	- 0.47
多少はゆとりがある	0.81	0.47	- 1.20
あまりゆとりはない	- 0.43	- 0.03	0.44
ほとんどゆとりはない	- 2.05*	0.27	1.79
まったくゆとりはない	- 0.27	- 0.45	0.65

8)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
2時間未満	- 0.60	1.65	- 0.78
2時間以上4時間未満	0.32	- 0.15	- 0.19
4時間以上	0.24	- 1.38	0.91

9)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
30分未満	- 1.23	0.50	0.81
30分以上2時間未満	1.75	- 0.99	- 0.91
2時間以上4時間未満	0.58	0.34	- 0.86
4時間以上	- 1.36	0.30	1.10

10)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
かなりゆとりがある	1.86	- 0.47	- 1.44
多少はゆとりがある	2.25*	0.49	- 2.62*
あまりゆとりはない	- 2.28*	0.56	1.77
ほとんどゆとりはない	- 0.76	- 0.66	1.31
まったくゆとりはない	- 0.80	- 0.97	1.61

11)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
中の上以上	2.27*	- 1.34	- 1.11
中の中	- 0.22	1.72	- 1.23
中の下	- 0.12	- 1.97 *	1.78
下の上	0.18	0.18	- 0.33
下の中以下	- 2.44*	1.26	1.35

12)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
かなりゆとりがある	1.59	0.41	- 1.90
多少はゆとりがある	3.44**	- 0.70	- 2.80**
あまりゆとりはない	- 1.60	1.17	0.60
ほとんどゆとりはない	- 3.62**	- 0.20	3.73**
まったくゆとりはない	- 1.65	- 1.34	2.73**

13)

	参加したい	参加したくない
非常に健康	3.20**	- 3.20**
健康	8.02**	- 8.02**
あまり健康でない	- 8.13**	8.13**
まったく健康でない	- 4.09**	4.09**

アクティブシニアのボランティア活動参加と構造的制約条件

14)

	参加したい	参加したくない
かなりゆとりがある	0.07	-0.07
多少はゆとりがある	2.29*	-2.29*
あまりゆとりはない	-2.00*	2.00*
ほとんどゆとりはない	-1.53	1.53
まったくゆとりはない	1.00	-1.00

15)

	参加したい	参加したくない
2時間未満	0.16	-0.16
2時間以上4時間未満	0.76	-0.76
4時間以上	0.90	0.90

16)

	参加したい	参加したくない
30分未満	-0.64	0.64
30分以上2時間未満	1.68	-1.68
2時間以上4時間未満	-0.06	0.06
4時間以上	-1.31	1.31

17)

	参加したい	参加したくない
かなりゆとりがある	1.86	-1.86
多少はゆとりがある	3.64**	-3.64**
あまりゆとりはない	-2.82**	2.82**
ほとんどゆとりはない	-1.31	1.31
まったくゆとりはない	-1.98*	1.98*

18)

	参加したい	参加したくない
中の上以上	1.59	-1.59
中の中	0.20	-0.20
中の下	-0.47	0.47
下の上	0.69	-0.69
下の中以下	-2.33*	2.33*

19)

	参加したい	参加したくない
かなりゆとりがある	2.64**	-2.64**
多少はゆとりがある	5.58**	-5.58**
あまりゆとりはない	-3.41**	3.41**
ほとんどゆとりはない	-4.27**	4.27**
まったくゆとりはない	-2.96**	2.96**

20)

	参加したい	参加したくない
非常に健康	0.82	-0.82
健康	4.19**	-4.19**
あまり健康でない	-4.41**	4.41**
まったく健康でない	-1.79	1.79

21)

	参加したい	参加したくない
かなりゆとりがある	1.15	-1.15
多少はゆとりがある	1.00	-1.00
あまりゆとりはない	-2.90**	2.90**
ほとんどゆとりはない	0.39	-0.39
まったくゆとりはない	0.88	-0.88

22)

	参加したい	参加したくない
2時間未満	0.15	-0.15
2時間以上4時間未満	-0.37	0.37
4時間以上	0.23	-0.23

23)

	参加したい	参加したくない
30分未満	-0.33	0.33
30分以上2時間未満	1.38	-1.38
2時間以上4時間未満	-0.73	0.73
4時間以上	-0.65	0.65

24)

	参加したい	参加したくない
かなりゆとりがある	-0.64	0.64
多少はゆとりがある	2.23**	-2.23**
あまりゆとりはない	-1.88	1.88
ほとんどゆとりはない	0.16	-0.16
まったくゆとりはない	-0.72	0.72

25)

	参加したい	参加したくない
中の上以上	0.55	-0.55
中の中	0.49	-0.49
中の下	-1.85	1.85
下の上	1.04	-1.04
下の中以下	0.09	-0.09

アクティブシニアのボランティア活動参加と構造的制約条件

26)

	参加したい	参加したくない
かなりゆとりがある	1.15	- 1.15
多少はゆとりがある	0.83	- 0.83
あまりゆとりはない	- 0.87	0.87
ほとんどゆとりはない	- 0.71	0.71
まったくゆとりはない	- 1.48	1.48

27) 相関係数として、spearmanの順位相関係数を算出してある。

28)

	クラスター 1	クラスター 2	クラスター 3
男性	- 2.92**	2.75**	0.02
女性	2.92**	- 2.75**	0.02

29) 地域の高齢化が進む中で、シニア層の男性に町内会長・自治会長をはじめとする地域の役職が集中し、各種のゆとりを乏しくしている可能性が考えられる。今後の検証課題としたい。

30)

	クラスター 1	クラスター 2	クラスター 3
60歳代	1.81	- 0.94	- 0.91
70歳以上	- 1.81	0.94	0.91

31) 調査データからは加齢に伴う健康状態の悪化(クラスター3の増加)は確認されなかった。収集したデータが自記式のアンケート調査に回答可能なシニア層のものに限定されていることが影響している可能性が考えられる。

32)

	参加したい	参加したくない
クラスター 1	4.08**	- 4.08**
クラスター 2	- 1.51**	1.51
クラスター 3	- 3.10**	3.10**

33)

	参加したい	参加したくない
クラスター 1	6.81**	- 6.81**
クラスター 2	- 2.97**	2.97**
クラスター 3	- 4.61**	4.61**

34) コアメンバーの継続的な活動参加と時間的な要因の関係に関しては、塚本利幸・霜浦森平・山添史郎・野田浩資 (2004) を参照。

参考文献

- 跡田直澄・福重元嗣 (2000) 「中高年のボランティア活動への参加構造－アンケート調査個票に基づく要因分析」『季刊・社会保障研究』36-2: 246-255
- 藤原佳典・西真理子・渡辺直紀・李相侖・井上かず子・吉田裕人・佐久間尚子・呉田陽一・石井賢二・内田勇人・角野文彦・新開省二 (2006) 「都市高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム－“REPRINTS”の1年の歩みと短期的効果－」『日本公衛誌』53-9: 702-714
- 藤原佳典・杉原陽子・新開省二 (2005) 「ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響－地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義」『日本公衛誌』52-4: 293-307
- 福井県立大学ボランティア研究会【塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・小林明子】 (2014) 『アクティブシニアのボランティア活動参加に関する研究』福井県立大学地域貢献研究・平成24～25年度調査研究報告書
- 舟木紳介・塚本利幸・橋本直子・永井裕子 (2017) 「アクティブシニアのICT利用とボランティア活動－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から3－」『福井県立大学論集』49:1-14
- 広瀬幸雄 (1995) 『環境と消費の社会心理学——私益と共益のジレンマ』名古屋大学出版会
- 金貞任・新開省二・熊谷修・藤原佳典・吉田祐子・天野秀紀・鈴木隆雄 (2004) 「地域中高年者の社会参加の現状とその関連要因－埼玉県鳩山町の調査から－」『日本公衛誌』51-5: 322-334
- 馬欣欣 (2014) 「高齢者におけるボランティア供給の決定要因に関する実証分析」『日本労働研究雑誌』643: 70-80
- 三谷はるよ (2016) 『ボランティアを生まだすもの 利他の計量社会学』有斐閣
- 望月七重・李政元・包敏 (2002) 「高齢者のボランティア活動 (参加・継続意向) に影響を与える要因－高齢者大学の社会還元活動実態調査から－」『社会学部紀要』(関西学院大学) 91: 181-193
- 野中久美子・村山陽・倉岡正高・藤原佳典 (2013) 『高齢者による社会参加や生涯学習活動における継続支援プログラムの開発』平成24年度「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究調査報告書
- 桜井政成 (2002) 「複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析－京都市域のボランティアを対象とした調査より－」『ノンプロフィット・レビュー』(日本NPO学会) 2-2: 111-122
- 桜井政成 (2005) 「ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異」『ノンプロフィット・レビュー』(日本NPO学会) 5-2: 103-113
- 島貴秀樹・本田春彦・伊藤常久・河西敏幸・高戸仁郎・坂本讓・犬塚剛・伊藤弓月・荒山直子・植木章三・芳賀博 (2007) 「地域在住高齢者の介護予防推進ボランティア活動と社会・身体的健康およびQOLとの関係」『日本公衛誌』54-11: 749-759
- 総務省 (2010) 『平成22年度情報通信白書』
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h22/> (2014.2.5参照)
- 総務省 (2013) 『ICT超高齢社会構想会議報告書』
http://www.soumu.go.jp/nemu_news/01ryutsu02_02000069.html (2014.2.5参照)
- 塚本利幸 (2011) 「福井県における社会活動参加の現状と課題」『ふくい地域経済研究』13: 43-60
- 塚本利幸 (2012) 「ボランティア活動参加とジェンダー」『日本ジェンダー研究』15: 65-79
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2016a) 「アクティブシニアのボランティア活動参加と基本属性－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から1－」『福井県立大学論集』47:19-43
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2016b) 「アクティブシニアのボランティア活動の参加の様態－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から2－」『福井県立大学論集』47:45-73
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2017) 「アクティブシニアのボランティア活動参加と社会関係資本－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から4－」『福井県立大学論集』49:15-44

- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子 (2018) 「アクティブシニアのボランティア活動参加と社会問題への関心－福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から5－」『福井県立大学論集』50:27-58
- 塚本利幸・小林明子・酒井美和 (2013) 「混住化地域の近隣関係における互酬性－福井市の事例から－」『福井県立大学論集』41: 13-38
- 塚本利幸・霜浦森平・山添史郎・野田浩資 (2002) 「環境ボランティア活動への参加と生活経験」『福井県立大学論集』21: 39-55
- 塚本利幸・霜浦森平・山添史郎・野田浩資 (2004) 「環境ボランティア活動の多様性と参加の規程要因－参加意欲と参加経験のギャップをめぐって－」『福井県立大学論集』23: 73-90
- 塚本利幸・霜浦森平・山添史郎・野田浩資 (2012) 「ボランティア活動参加と地域活動参加, 近隣交際の関連についての考察－福井市の事例から－」『ふくい地域経済研究』15: 15-36
- 山添史郎・霜浦森平・塚本利幸・野田浩資 (2012a) 「地域環境保全活動への参加と社会関係資本－滋賀県守山市のNPO法人「びわこ豊穡の郷」を事例にして－」『環境社会学研究』18: 155-166
- 山添史郎・霜浦森平・塚本利幸・野田浩資 (2012b) 「地域環境NPOの会員の年齢層と参加の様態－滋賀県守山市のNPO法人『びわこ豊穡の郷』を事例として」『京都府立大学学術報告(公共政策)』4: 73-88
- 山添史郎・霜浦森平・塚本利幸・野田浩資 (2015) 「地域環境NPO会員の社会関係資本と参加の様態－NPO法人「びわこ豊穡の郷」の会員構成の変化をめぐって」『水資源・環境研究』28-2: 149-158
- 山添史郎・塚本利幸・霜浦森平・野田浩資 (2017) 「地域環境NPOの展開プロセスと参加層の変化－NPO法人「びわこ豊穡の郷」の会員アンケート調査の3時点比較－」『水資源・環境研究』30-2: 66-72
- 山添史郎・塚本利幸・霜浦森平・野田浩資 (2017) 「地域環境NPOにおける社会運動性と事業性－NPO法人「びわこ豊穡の郷」の展開プロセスと会員の参加の様態をめぐって－」『京都府立大学学術報告. 公共政策』9: 39-58

